へき地小規模校における少人数・複式授業運営の基本的観点

玉　井　康　之
（北海道教育大学　釧路校）

Basic Viewpoint of Small & Multi Grade Class Management in Rural Small School

Yasuyuki TAMAI

はじめに-少人数・複式授業運営に臨む姿勢と考え方

本稿の課題は，へき地・小規模校に赴任する教師が，極少人数授業や複式授業に直面する中で，どのようなことを基本的な授業運営の観点として意識すれば良いかをとらえることを課題としている。本来授業展開の基本的な観点・方法は，市街地・大規模校を含めてどこでも意識しなければならない観点・方法も多いために，ここで取り上げる観点も，へき地・小規模校だけに適応される観点・方法ということではない。しかし，若手教師がほとんど経験したことのない複式授業や極少人数指導では，その特殊性の中で困惑することが少なくなく，特に意識しておかなければならない。

へき地・小規模校での教師の指導力も，一般的な指導力と併行して徐々に高まっていくものであるが，少なくとも少人数・複式授業運営の基本的な観点を踏まえながら，実践方法の方向性だけを意識しておくことは重要である。そのため，ここでは，へき地複式授業の細部の方法を採る前に留意する基本的な授業運営の観点と方法をとらえておきたい。細部の少人数・複式授業の技能・方法や教科の内容・方法は，最終的には各教師が学校内外の特性と自分の力量・特性を踏まえながら，研修と実践を通じて展開していくものである。

へき地・小規模校の授業では，複式授業や極少人数学級の授業が多いが，いずれも共通するのは，人数が極めて少ないことである。さらに小学校では通学距離が遠距離となる学校統合も限界があるため，複式授業を選択せざるを得ず，定められた学級人数以下になると複式授業になる。

学級人数が少ないことによる学習指導の特徴と少人数を活かした授業運営の可能性は，以下の五つである。

第一に，へき地・小規模校の授業では，個々の子どもの学習実態が見えやすいことである。個々の子どもの実態を把握しながら個別指導計画を立てることも容易である。したがって，それを利点として授業運営に活かす方法を考えていくことが重要である。

第二に，少人数であるために，逆に馴れ合いになって授業のけじめと規律が曖昧になる可能性も高くなることである。そのため，授業と生活の区別をつけ，意識的に授業中の学習規律と学習ルールを高めていくことが重要である。また学習ルールに関するサインなどを決めておき，効率的に指示が伝わるようにすることも重要である。

第三に，複式授業は，わたり・ずらしが基本的な指導形態となるが，このわたり・ずらしの中で生じる授業のロスタイムをどれだけ削減できるかが重要になることである。また複式学級は異学年集団でもあるため，異学年交流を含めた授業形態も複式を有効に活かす一つの方法となる。

第四に，間接指導における自主学習と相互学習の方法を確立することである。間接指導時は，教師が直接指示しているわけではないため，ある程度自分たちでグループ学習を運営できる体制と方法が不可欠となる。

第五に，間接指導やグループワークが効果的に展開するためにも，学習到達度が一定程度同水準に引き上げられておく必要がある。そのためには，グループワークで補えない部分を個別学習指導で引き上げながら，学習到達度を標準化しておくことが必要である。

このように極少人数授業・複式授業は，それ自体が持つ特殊性と課題を意識しながら，それをプラス面に転換していく必要性がある。一方，複式授業等は，難しさもあるが，本来的に多人数の学級に比べてかなり指導しやすい部分もあることを意識して，教師が前向きな姿勢で複式授業・極少人数授業に臨むことが不可欠である。マイナス面やできないことばかりを意識すると，そのマイナス思考が学級の雰囲気や，指導方法の改善の意欲を低

下させてしまう。

また個々の教師が工夫していることも，日常的な交流の重要性を意識しておかないと交流されないために，情報交換を意識的に進めていくことが必要である。へき地は学校を越えた教師の日常的な交流も少ないため，常に研修で外部に出ていく機会を作り，収集した情報を面的に広げていくことが求められる。

1．個々の子どもの学習実態把握と個々の指導計画づくり

⑴ 個々の子どもの学習実態の把握

一般的に教師は，児童理解を深めるとともに，単元に即して子どものつまずきの箇所を把握しなければならない。ただ，教師は一般的に指示・説明をしている授業中などでは，頭の中で指示・説明の見通しを立てながら，一斉の指示・説明による全体指導を優先させる為に，個々の子どものつまずきを一人一人に即してとらえることは難しい。問題を抱える子どもやできる子どもには目がいくが，その他の子どもの一人一人のつまずきの箇所は，どうしても授業時間内では見過ごしてしまう。

しかしある程度の極少人数であれば，教師が指示・説明しているときでも，子どもの反応や発言からつまずきを把握したり，個々に問題を解いている時間や作業をしている時間内にも学習到達度やつまずきをとらえることができる。間接指導時も子ども全員に関して何をやっているか観察できる。すなわちへき地小規模校の極少人数学級では，ある程度授業時間に確実に個々の子どもの単元内容ごとのつまずきをとらえることができる。

このような少人数学級の特性を生かして，個々の子どものつまずきを意識的に把握するように努めることが，へき地小規模校の特性を生かした授業づくりとなる。個々の子どもに合わせて状況を観察できる環境にあるため，授業展開の全体像を考えることと同時に，意識的に個々の子どもの状況を観察することが重要になる。

⑵ 個別指導計画づくりと学習のつまずきの克服

すでに極少人数のへき地・小規模校でも，学力格差は大きくなっているが,早い段階でその問題に気がつけば,個別指導を含めて遅れを回復させることができる。数人しかいない学級であれば，学級運営計画・学習指導計画と同時に，一人一人の指導内容・方法をどのようにするかの個々の指導計画を立てることが重要になる。

個々の指導計画は，ノート指導や家庭学習や補充学習なども重要になる。ノートの点検は，思考のプロセスも含めて理解できている所を把握することができる。ノート指導で，何をやったかをきちんと記録していくように指導すれば，それを通じて理解度をはかり，自らの振り返りに役立てることができる。家庭学習や補充学習は，授業内で達成できなかった部分を補う上で重要である。これらは直接的には授業実践ではないが，より効果的に授業が展開できる基礎的条件となる。

このように個別の状況が見えやすい条件を活かして，意識的に個々の子どもの状況を把握し，それを指導計画づくりに活かしていくことが重要である。ただし，個別指導計画は，家庭教師のように一対一の授業指導にならないように心がけておかなければならない。集団としての学級づくりや学習指導は，少人数であっても個別指導の集積ではないからである。

2．授業関係・生活関係の規律の区別と学習ルールの策定

学級経営や学習規律のルール・マナーはどの学校・学級においても必要であるが，複式学級では，学級経営や学習規律のルール・マナーはいっそう不可欠となる。

その理由は，第一に，少人数であればあるほど，教師と子どもの関係が馴れ合い的な関係になってしまうために，けじめが曖昧になる可能性があるからである。それを抑制するために，授業と生活の区別を明確にし，学習規律およびけじめを明示することが重要である。

第二に，極少人数学級では複式授業となるために，教師がいない時間においても，自主学習運営ができる学習規律は不可欠である。教師がいないときにでも自分たちで学習できる自己教育力が長期的には，問題解決力を高め，継続的に学習できる力となる。その場合も単に一人で自習するというだけでなく，複数の子どもどうしで一緒に学び合う関係力が必要になる。この学び合いを常に意識させることが指導観点としても重要になる。

第三に，授業を効率的に進めるために，授業運営に関する合図を決めて，進め方をルール化するということである。とりわけ複式授業では，効率的に授業を進めなければ，指導時間が足らなくなる。そのため例えば，“発言するとき”・“問題が理解できない時”・“質問したいとき”・“早く解き終わったとき”・“何をするか分からなかったとき”，などの合図を決めておき，その合図によって教師と子どもが相互に動けるようにしておけば，毎授業での言語による指示事項は少なくてすむ。

また子どもの合図に対して，教師からの合図も決めておく必要がある。例えば，“次の教科書説明文を黙読する”・“問題集を解く”・“隣の人と答え合わせをする”・“隣の人と議論する”，などの次の作業の合図を決めて，簡潔に指示できれば，子どもたちがただ待っているだけのロスタイムを少なくすることができる。

第四に，実験器具・道具の使い方や授業準備の作業方法と学習ルールを策定しておくことである。実験器具などの使い方や危険防止などは，ある程度原則をマニュアル化して覚えていかなければならない。その都度教えることよりも，最初に徹底してその使い方や危険防止を教えておき，それにしたがって実験器具・道具を準備したり使用したりすれば，それによって効率的に授業を進めることができる。

このように授業に臨む姿勢や授業の進め方に関する学習ルール・学習方法を策定し，それを徹底していくように促すことが，少人数での授業の緊張感と規律を高めていく。

3．全員参加型の授業とグループワークによる相互学習の拡大

少人数であれば，全員が授業中に発言・発表したり，学級・グループの中の何らかの役割を担うことができる。グループでは，学習委員・教科委員などの役割を付与して，学習グループを引っぱる役割を意識させることも重要である。

グループワークも，少人数であれば全員の子どもに目が届くために,教師が説明する時間を少なくして,グループワークの議論の中から子どものそれぞれのつまずきを指導することもできる。学年の子ども数が三人以上いれば確実に集団ができるので，グループワークを取り入れることが，子どもたちの授業参加感も高まっていく。

またグループワークは，集団的な学びの中で，問題解答の考え方やプロセス，および多様な方法が存在することに気がついていく。したがって，問題解答への理解が深まり，“解ける”から“分かる”のレベルへ発展させることができる。

さらにグループワークを進めることによって，できない子どもを引き上げることにもつながり，学習到達度も平準化していく。友達どうしの関係を媒介にして，子どもたち自身で問題を解ける喜びを感じさせるようにすることで，さらに自発的な授業参加意欲が向上していく。

このようにとらえると，へき地・小規模校の授業においては,たとえ同学年の子どもが二人であっても,グループワークによって意見交流をできるだけ進めていくこと，そして全員が発言・発表するなど，全員参加型の授業を心がけることが重要である。意識的にも学級全員が授業に関わることを原則として教師が授業運営をすることが求められる。

4．複式授業におけるわたり・ずらしの観点と方法

へき地・小規模校の中でも，複式学級を持つ学校の授業は，わたり・ずらしを前提にした授業であるため，このわたり・ずらしの基本的な方法を身につけておかなければならない。複式授業におけるわたり・ずらしの観点は，以下の通りである。

第一に，複式授業においては，課題提示を迅速に行うことである。複式授業は，単式学級ほど課題提示に時間をかけないで，授業の展開の中で時間をとることが求められる。最初の課題提示で時間をかけてしまうと，もう一つの学年が授業に入れないで待つことになってしまう。そのためには，授業の課題把握・めあてを意識させる導入部を鮮明に提起できるようにこころがける必要がある。

また複式授業では，わたり・ずらしの移動時間があるため，どうしても授業時間全体を通じて大なり小なりロスタイムが出てしまう。したがって一方の複式学年の待ち時間によるロスタイムにしないためにも，課題提示に時間をかけないで授業を開始し，すぐさま隣の学年に移動することが必要になる。課題提示が終わった後に，発問などで考えさせる時間を取ることで，授業開始におけるロスタイムを少なくし，スムーズに授業に入ることができる。

第二に，わたり・ずらしを若干ずらすだけで，同時間接方法を使うことである。それによって，教師も間接指導時間に次の指導内容を考える余裕を持つことができるため，授業全体の展開を考えながら指導に当たることができる。複式では，同時に複数の単元を扱うだけに，教師が目前の指導内容に追われて，授業展開をじっくり予想する余裕がない。そのように追われてしまうと，逆に子どもたちにしっかり考えさせる授業もできなくなってしまうために，同時間接方法を取り入れることも必要になる。

第三に，複式授業では，下学年がつまずいたときに，上学年がそれを教えたりヒント・アドバイスを与えたりするなど，上学年の指導力を活かすことも重要になることである。上学年は，下学年に教えることによって，過去の学習内容において，確実に理解を進めていくことになる。また下学年を引っぱっていくという意識は，あらゆる面において，自負心を高めていくことになる。そして下学年は，上学年のつまずきを前提にしたアドバイスであるために，教師の指導内容よりも身近に感じることがある。

これらの上学年と下学年の関係は，授業時間の中に学んだことを伝えたり教えあったりするだけでなく，休み

時間や放課後など，授業時間以外でも上学年と下学年の関係を作っておけば，上学年と下学年は，常に学び合いの関係を高めていく。

第四に，音楽・図工・体育などの芸能教科は，地域と連携した授業運営が重要になることである。芸能教科の到達度は，学年間の単元の積み重ねの問題ととらえるよりは，能力差・練習差の問題としてとらえれば，同一単元授業の中でも能力別指導を進めることができる。したがってわたり・ずらしの授業方法というよりも，練習量等による個人差の問題でもあるため，それをみんなで練習する意義と達成感が重要な動機になるものである。

芸能教科の達成動機を高めるためには，芸能教科の到達目標を地域行事と結びつけ，地域公開発表への責任感と意欲を高めていく授業が求められる。この芸能教科では，できる人ができない人を引っ張り，上級生が下級生を引っ張っていくことも必要である。へき地・小規模校においては，学校行事が地域行事にもなっており，地域も芸能練習などで学校に協力してくれるところが少なくない。このようなへき地・小規模校の特性を活かして，芸能教科の授業を地域と連携していくことが重要である。

5．間接指導における自主学習運営・授業運営規律の確立

へき地・小規模校では，間接指導時においてある程度子どもたち自身が授業を運営していかなければならないために，自主学習運営や授業運営の規律を高められるように指導していく必要がある。授業運営規律は，大規模学級においても求められるが，極小規模学級では自主学習・間接指導時間があること，複式授業には時間的制約があることにより，規律をいっそう意識する必要がある。自主学習運営・授業運営ができるような規律として重要な観点は，以下のような点である。

第一に，学習の前提として，学習に対する姿勢と準備の規律である。例えば，授業が始まる前に，教科書・ノート等は用意して，すぐに授業に入れるようにしておく必要がある。机の上での文具・教科書の置き方もパターン化する教師もいるが，これは教科書・教具の使い方で手間をとらないようにするための方法の一つである。授業開始の姿勢と挨拶などもけじめと区切りを明確にするための動機づけとなる。

第二に，教科書内容を含めた情報収集・基礎単語文献調べの方法である。問題を解いたり教科書記述を読んだりする場合にも，単語の意味が分からなかったりする場合もある。その時には，辞書や辞典を引くことも，一つの方法であることを教え，自分たちで辞書を引くようにすれば，基本的な内容で分からない箇所が出ても，自分で学習を進めることができる。教科書等の輪読を進めたり，教科書の既修事項にも立ち戻って確認するなど，現在の問題が分からなければ過去の学習に立ち戻って学習を進める方法も必要である。

第三に，間接指導がスムーズに進むためにも，間接指導に入る前の最初の直接指導で，授業のめあてと課題を明確にして，授業展開の中での指示内容を明確にしておくことである。そのためには，間接指導時に入る前に，課題解決の見通しまで持たせて，子どもたちが自分たちで進められることを確認してから間接指導を進めることも必要である。すなわち間接指導を任された子どもたちが，この授業で何をどの程度までやれば良いか，何をめあてとしているかが迷わないようにするということである。どのような授業でも，授業の課題把握・めあてを意識させることは重要であるが，間接指導のある複式授業ではとりわけ，導入部のめあてと授業の見通しを心がけさせることが重要である。

第四に，課題の早期終了児童への発展学習を含めた自主作業・自主課題の提示である。授業進度では，標準的な子どもに進度を合わせ，つまずいた子どもにも時間がかかるために，早く課題を終了する子どもが，時間を無駄にする場合もある。学習進度の速い子どもが時間を無駄にしないようにするためには，常に自分で取り組むことができる発展学習内容を用意することが必要である。例えば，市販教材を含めて年間ワークシートや教科書準拠資料等を用意したり，教科書準拠資料を用意しておくことも必要になる。

本来授業としては，課題を終えた子どもに対して，次の指示を適宜与える必要があるが，ある程度自分たちでできる作業メニューとワークシートを提示しておけば，その学習ルールに従って，自主的に運営することができる。これによって毎回指示する時間を省き，同時に，間接指導時のロスタイムを少なくすることができる。ただしワークシート・ドリル等は，間接指導時・発展学習には有効であるが，一方で単なる反復練習だけで，考えることを阻害するような使い方を避ける必要がある。

第五に，間接指導時においては，話し合い活動も重要な授業方法となるため，話し合いの方法と規律を高めていくことである。この話し合い活動ができるようにするためには，討論の内容・挙手等の発言の仕方・他人の話し中の意見の聴き方・司会の立て方と司会運営方法・異論のある時の発言の仕方，などの討論方法とマナーが，ある程度パターンとして定着されていなければならない。

第六には，教え合い・伝え合いの学習ルールである。分かった人がまだ分からない人に対しての教え合いを進

めることにより，学習進度が速い子どもも学習内容をいっそう深めることができる。できる子・速い子には，「隣の人に分かるような説明を考えてみよう」「説明してみよう」といった，進んだ子が遅れた子に教えてあげたり，理解力・説明力を高めるために，解けた問題の根拠を自分で説明できるようにするものである。またレベルの違いがなければ，「答え合わせをしよう」「解き方をお互いに説明してみよう」という相互の解答プロセスの確認と教え合いのルールも必要である。この教え合い・伝え合いのルールによって，多様な解き方を相互に学び合うことができる。

以上のような間接指導における自主学習運営・授業運営規律の確立をはかることによって，間接指導がスムーズに展開していく。そのためには，教師自身が自主的に授業運営を進めることの重要性を理解し，単に指示待ちで動くことを授業スタイルとせずに，自主的な運営を展開できる方法を作っておかなければならない。

おわりに

本稿では，極少人数学級の授業運営に関する基本的観点をとらえてきた。極少人数学級では，人数が多い学級での発言や授業方法でできることが少人数学級でできなくなるなど，教師にとって戸惑うことも少なくない。一方極少人数であれば，少人数を活かして授業運営ができるメリットもある。同じことが逆に大人数の学級ではできないことも少なくない。

この点を意識しながら，メリットを活かし，デメリットを克服するための授業運営を意識することが求められる。それによって，極少人数であることが，即学校統廃合しなければならないという結論にはならなくなる。極少人数であることをメリットとして意識した授業運営の基本的観点は，以下の五点である。

第一に，極少人数の授業では，個々の子どものつまずきを把握できるために，一人一人の学習実態を把握し，個別指導計画を立てていくことが重要であることを指摘した。個々の子どもの把握と指導は，授業中でも把握することが可能であるし，またノート指導や家庭学習指導においても，密接な連携指導を進めることができる。学級人数が多いところでは，特定の子どもの個別指導は，子どもから“ひいき”“不公平”とも映る可能性があり，教師も個別の指導計画や直接指導を躊躇する傾向がある。しかし，へき地・小規模校ではむしろ積極的に，個々の状況を把握して個別指導計画を立てていくことが求められる。

第二に，授業関係・生活関係の規律の区別と学習ルールの策定である。少人数では，教師と子どもの関係および子どもどうしの関係では，親密な関係があり，教育活動の条件としては非常にいい関係を持っている。逆にそのけじめがつかなくなった場合には，授業以外の親密な関係が授業での馴れ合い関係になってしまう場合もある。したがって意識して授業と生活の関係を区別することが求められる。さらに授業・学習に臨む態度や授業準備のルールを策定して，それらを学級運営の原則にしていくことが授業運営にとっても不可欠である。この授業運営の原則化によって，授業のロスタイムをなくすことにもつながり，授業内容を濃密にする条件ともなる。

第三に，全員参加型の授業とグループワークによって，相互学習の効果を高めていくことである。少人数の学級であれば，子どもどうしで議論していてもどこでつまずいているかをすべて把握することができる。したがって教師が全部説明しなくても，子どもどうしのグループワークの中で，つまずきや議論の方向性を指導・修正できる。グループワークをすることによって，言語的な交流も図れるために，知識をいかに組み合わせて使うかという応用的な理解力に高めていくことができる。また学び合いの習慣が，全体として底上げをして学習到達度を高位平準化させていく。学習は個々別々の課題であるという発想から，全員参加型学習・相互学習の発想をもって少人数学習集団の指導を展開していくことが求められる。

第四に，複式授業におけるわたり・ずらしの工夫である。この二学年併行の複式授業の特性では，わたり・ずらしが単なる授業時間の半分になってしまうことがないような工夫が不可欠である。そのため，課題提示の迅速性や同時間接方法などを使って，ロスタイムをなくすとともに，教師がゆとりを持って二学年を指導できるようにしていかなければならない。また縦の学年関係を積極的に活かすように，授業時間内外で教え合ったり，発表し合ったりする時間を設けることで，上学年の指導性や自負心なども養うことができる。このようなわたり・ずらしが，授業時間を削減してしまうことがないように，わたり・ずらしを工夫する観点が不可欠である。

第五に，間接指導時における自主学習運営・授業運営規律を確立していくことである。学習前提としての態度育成に加えて，辞典等の調べ方や輪読などの学習の進め方・討論の仕方・早く終了した場合の発展学習・教え合いのマナー等が身についていれば，教師がいない間接指導時にも子どもたち自身で学習を進めていくことができる。教師の指示待ちの授業にならないという学習姿勢は，学習全体の姿勢および，学校生活全体の姿勢に連動していく。

以上の五つの観点は，本来的には学校規模に関係なくいずれの学校においても踏まえなければならない観点で

あるが，それが現実的にできるかどうかとなると，学級規模によってできないことも少なくない。また少人数であるからこそ新たにできることも少なくない。以上の観点は，特にへき地・小規模校の学級人数が少ない学級において意識して心がけなければならない観点である。同時に意識しておけば，むしろメリットとして，大人数学級ではできない活動を極小規模・少人数学級ではできる条件があるということも，積極面として認識しておく必要がある。

参考文献

広島大学附属東雲小学校編『複式教育ハンドブック』東洋館出版社，2010年

長崎・鹿児島・琉球３大学連携研究「複式学級指導法」編集委員会編『複式学級指導法』東京教学社，2009年